

領域「人間関係」に関する専門的事項・授業内容の一考察

— 授業内容と保育実践を通して —

久保田 真規子

はじめに

文部科学省・厚生労働省・内閣府が連携した3法令同時改定は平成29年3月末改訂（定）告示後、平成30年から施行された。さらに質の高い幼稚園教諭を養成するために、平成31年に改訂された幼稚園教諭養成課程の教職課程に設置される「領域及び保育内容の指導法に関する科目」は「領域に関する専門的事項」と「保育内容指導法（情報機器及び教材の活用操作含む）」より構成されているⁱ⁾。本研究は、「子どもと人間関係・領域に関する専門的事項」をどう構成し、道筋をつけていくかについて先行研究・モデルカリキュラムをもとに授業構想について考察したものである。本論では、授業のねらい・工夫の柱を明らかにし、授業内容についてモデルカリキュラムと2校の養成校シラバスをもとに、求められる授業内容に着目した。神長（2017）は「領域に関する専門的事項」は幼稚園教育における「領域それぞれの学問的背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする」ものであり、『何をどのように指導するのか』という視点で見た時の『何を』を深める部分として位置づけられているのが重要と述べているⁱⁱ⁾。そこで、本論では授業構想において、現場の保育者の語りや実践の姿から、これからの保育者養成に必要な力を育むために何が必要かを深めた内容をまとめたものである。

キーワード領域「人間関係」幼稚園教諭養成課程、専門的事項、モデルカリキュラム

1. 研究の背景

幼児教育の重要性が着目される中、平成28年12月「幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校」の学習指導要領の、幼稚園教育要領の改訂が実施された。これらは日本の教育において3法令改訂（定）が幼児教育・小学校・中学校・高校教育を含めた大きな流れの上に成り立っているということだ。3法令改定の趣旨は3つある。①3歳以上のこどもについての「幼児教育の共通化」②子ども・子育て支援新制度での「幼児教育の「質の方向性」③小学校から見たときの「幼児教育で育つ力の明確化」であるⁱⁱⁱ⁾。

平成28年12月の答申の中で現代的な課題を踏まえた教育内容の見直しの項目に「幼児

期におけるいわゆる非認知的能力を育むことの重要性の指導などを踏まえ、身近な大人との深い信頼関係に基づく関わりや安定した情緒の下で例えば、親しみや思いやりをもって様々な人と接したり、自分の気持ちを調整したり、くじけずに自分でやりぬくようにしたり、前向きな見通しをもったり幼児が自分の良さや、特徴に気づき、自身を持って行動したりするようにする。」という記載がある。

幼稚園教育要領第1章総則 幼稚園教育の基本 3では、『幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、(中略)幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。』^{iv)}と記載し、すべての総則に「育みたい資質・能力」としての3つの柱と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿としての10の項目が記された。幼児教育に育てたい資質・能力が具体的姿で示され、求められる幼稚園教育が明らかになっている。そこで保育内容「人間関係」において、どこが改訂(定)のポイントになっているのかをあきらかにし、養成課程においては、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を保育の中で具体的姿として確認していく視点が授業構想の一助となるのではないかと考えた。

1-1 幼稚園教育要領「人間関係」の改訂ポイント

改訂された新要領に示された幼児に育ってほしい10の姿に関連する、人間関係については、「道徳性・規範意識の芽生え」と記述され、人との関わりの中で身につけていくこととして重視されている。「友達と様々な体験をする中で良いことと悪いことがわかり、自分の行動を振り返り、友達の気持ちに共感することや道徳性が芽生えること」は家庭とは違う他者や、集団生活の中で葛藤を乗り越えながら、自分の気持ちを出しつつ仲間と一緒にどのように生活し遊びを展開していくのかを学ぶプロセスがあるということである。

特に、幼稚園教育要領解説(2018)^{v)}の中で、第2章ねらい及び内容の記載に、(2)身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。という記載の下線部分に着目したい。この部分は、園児の姿を理解しようとするならば、保育者は園児と関わっているときの自分自身の在り方や関わり方に、少しでも気付いていく必要があるということだ。実際に行った園児との関わりを振り返り、自分自身を見つめることを通して、自分自身に気付いていくことができるのであり、繰り返し、そのように努めることで、園児一人一人に応じたより適切な関わりができるようになるのである。また、自分の心の状態を認識し、安定した落ち着いた内容の取扱いでは、(1)教師の信頼にささえられて、(略)試行錯誤しながら諦めずにり遂げることの達成感や前向きな見通しをもって…(以下略)(2)1人1人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。(略)教師や他の用事に認められる体験し自分の良さや特徴に気づき自信をもって行動できるようにすることであると詳細に記載さ

れている。飛田(2017)^{vi)}は旧幼稚園教育要領と新幼稚園教育要領の「人間関係」教師の関わり方の記載の比較をしているが、「関わり」については旧幼稚園教育要領ではひらがなの「かかわり」であったのが漢字に変更されていること「1. ねらい (2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。 2. 内容 (5)友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。 3. 内容の取扱い (1) 教師と信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。(中略)」この下線部分が注目する点であると述べている。

文部科学省「幼稚園教育要領解説」(平成30年3月)「人間関係」内容の取扱いの解説では、「試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感や満足感を味わうことができるようにするには、その心の動きに対して柔軟な応じ方をすることが重要である。教師が答えを示すのではなく、幼児の心の動きに沿って共に心を動かしたり、知恵を出し合ったりする関わり方が求められる。心の動きに沿った教師の応答は、幼児と生活を共にしながら心の動きを感じ取ろうとする過程の中で生まれてくる。教師の応じ方は全て幼児の内面を理解することと表裏一体となり、切り離せない物なのである。」^{vii)}と記載されている。この言葉が意味するものは、幼稚園教諭の専門性には、幼児理解・総合的に指導する力が必要とされる。1人1人の日々の気付きや変化に着目する観察力に加え、環境、子ども同士の関係に臨機応変に対応する総合的な実践力がもとめられているといえよう。

そのうえで新幼稚園教育要領において「人間関係」は子ども同士の関係ばかりでなく教師と子どもとの人間関係が意図的、無意図的に影響を与えていることを理解しておくことが重要だと考える。

1-2 研究の目的

以上のことから、モデルカリキュラムの全体像をつかみ実践現場の事例とともに授業構想する事を目的とする。本研究は以下の3つのステップでまとめたものである。

- ① 先行研究調査から「幼児と教育・人間関係、指導法について」モデルカリキュラムの内容をつかみ、求められる幼稚園教諭の姿を明らかにする。
- ② 先行している保育者養成校のシラバスにおいて何をねらいとし、授業内容を構築しているのか、事例を調査し特色を明らかにする。
- ③ 保育現場の実践例から必要とされる授業構想を逆照射しモデルカリキュラムと紐付けを行い、授業の在り方、及び具体的内容について検証する。

2. 領域専門的事項に関する先行研究

文部科学省の『教育課程コアカリキュラム』^{viii)}

モデルカリキュラムには「幼児と人間関係」について当該科目では、「現代の幼児の人間関係の育ちに影響を与えている社会要因について理解し、幼児教育で保障すべき教育内容に関する知識を身に付ける。特に領域人間関係の基礎となる基礎理論として、関係発達と論的視点について学び、他者との関係や集団との関係の中で、幼児期の人と関わる力が育つことを理解する。」という授業の概要全体目標がある。先行研究調査から各養成校では、何を軸として養成課程のカリキュラム作成のポイントを構築しているか参考とすべく調査した。

①『平成 28 年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質脳力の視点から養成課程の質保証を考える－』^{ix)}

平成 29 年 3 月 一般社団法人 保育教諭養成課程研究では、「幼稚園教諭として不易とされる資質能力として、幼稚園教育要領に示す 5 領域の教育内容に関する専門知識を備えるとともに 5 領域に示す教育内容を指導するために必要な力等を備え、具体的には、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等、幼児期の学校教育を実践専門家としての側面からみていく必要がある」と記されている。さらに家庭との連携、小学校の円滑な接続のための力や、特別支援が必要な子ども達への指導を実践していく専門家としての側面が記載され、新たな課題、ICT 活用など自らの資質向上に向けた努力を惜しまない姿勢や力量が幼稚園教諭に求められている。研修ガイド^{x)}の作成のもと、一貫してキャリアステージに応じた研修についても示され、組織的に課題を解決する力はそれぞれの成長の節目・ミドルステージにももともとめられる。養成課程においては、幼児教育における基礎的知識や理解、技能の修得、実習等色々あるが子どもへの温かな感情の育ちも期待されている。

②中川智之ら (2018)^{xi)} が、保育内容領域「人間関係」及び「環境」のモデルカリキュラムを手がかりとし「領域に関する専門的事項」に関わるこれまでの研究として、奈良教育大学の行っている一連の研究を土台に、幼稚園教育要領の各領域に示された各ねらいの内容と科目を担当する教員の研究分野における幼児教育に関する知見との関係について論じている。特に注目すべきは、領域「人間関係」においては、「幼稚園の生活・活動」についても多く取り扱われ、他方、領域「環境」においては、「幼稚園の生活・活動」に注目したものは少なく、「周囲の環境」が多く取り扱われているという二者の対比である。これは、幼児が経験し得る様々な環境について理解を深め、幼児の多様な経験を幼稚園外にも取り入れる内容である。領域「人間関係」と領域「環境」の授業モデルにおけるこのような相違から、「領域に関する専門的事項」は、幼稚園外における幼児の

経験内容もその射程に含んでいると考えられる論である。幼稚園教諭としての指導法を学修する「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」の射程とは異なると指摘し、「領域に関する専門的事項」の科目においては、幼稚園という枠組みに捕らわれることなく、現代の家庭や地域社会における幼児の生活を踏まえた授業内容を構想すること強調している。さらに、現代の特徴や課題についても、授業内容の射程に含めるべきものとして考えられる。この点は、シラバス作成上、授業内容を組み立てる際に「環境」と「人間関係」の工夫において参考にしたい視点である。

3. 領域「人間関係」専門的事項に関するモデルカリキュラム

モデルカリキュラム作成は、各大学において、その特色・編成・学生の興味関心に合わせて創意工夫されることを吟味し取り入れることが求められている。

そのねらいは、学生が養成段階で「全体目標」「一般目標」「到達目標」と見通しを持って学ぶこと、そして、5領域の教育内容を実践するために必要な資質能力を明確化し、幼稚園教諭養成の質保証を行い、幼児教育の質の向上につなげる意図がある。

以上のことを踏まえ「幼児と人間関係」の領域に関する専門的事項を以下に示す。

3-1 モデルカリキュラムの実際

以下に「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム^{xiii)}を示す。

全体目標

当該科目では領域人間関係の指導の基礎となる幼児の人と関わる力の育ちに関する専門的事項について身に付ける。

(1) 幼児と人間関係における現代的課題

一般目標：幼児をとりまく人間関係をめぐる現代的課題を理解する。

到達目標 1) 幼児を取り巻く人間関係の現代的特徴とその社会的背景を理解している。

2) 人と関わる力のそだちがその後続く一人一人の人生を支える力となることを理解している。

(2) 幼児の発達と領域「人間関係」

一般目標：幼児をとりまく人間関係をめぐる現代的課題を理解する。

到達目標 1) 幼児期の人間関係の発達について、幼稚園生活における関係発達論的視点から理解する。

2) 幼児期の遊びや生活のなかで育ち人と関わる力の発達について、教師との関係、幼児との関係、集団の中での育ちを観点として説明できる。

3) 自立心の育ちについて発達の姿と合わせて説明できる。

4) 協同性の育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる。

5) 道徳性・規範意識の芽生えについて、発達の姿と合わせて説明できる。

6) 家族や地域との関わりについて、発達の姿と合わせて説明できる。

[留意事項] 1) 映像資料や事例等を且つ融資幼児期の人間関係の発達について、幼稚園生活における関係発達論的視点から理解する。

2) 領域「人間関係」の背景となる学問的基礎や幼児教育に関わる専門性を有する人材が担当するにふさわしい。

考えられる授業モデル

1) 講義初めの段階で、親子や兄弟関係、地域における子ども同士の関わり等、幼児を取り巻く人間関係について、1950年代頃からの年代毎に異なる特徴的な事例を挙げながら、現代の特徴と課題を考える機会を設け、講義の内容に関心をもたせる。

(1)-1)

2) 幼稚園教育において育みたい資質能力を領域「人間関係」の視点から考察し、大学生生活で求められる人と関わる力との関連について話し合う。

(2)-2)

3) 幼児の様々な発達の諸側面が人との関わりで育つことについてそれぞれの発達の時期の特徴と関連付けて理解できるように、具体的な事例を基に説明する。

(2)-1)、(2)-2)、(2)-3)、(2)-4)、(2)-5)、(2)-6)

4) 幼稚園生活における規矩にはどのようなものがあるか等について、具体例を挙げ、それぞれの決まりが幼児にとってどのような意味をもつか考え、話し合う機会を設ける。

(2)-5)

5) 人間関係領域の最新の知見に基づき、集団の中で見られる具体的な幼児の姿や幼児同士の関係の発達が理解できるように説明する。

(2)-1)、(2)-2)、(2)-3)、(2)-4)、(2)-5)、(2)-6)

※上記授業モデルに付記した番号は、特に関連の深い到達目標の番号であり、Noとしては示していないが、他に関連する項目もあるので、事例の着眼点や授業展開の仕方によってことになってくることに留意。

以上が「領域に関する専門的事項」の人間関係のモデルカリキュラム（保育教諭養成課程研究会 2017）として具体的に記載されている。このモデルカリキュラムをもとに人間関係に求められているものは何かについて、次に一般社団法人保育教諭養成課程研究会が出している幼児一人一人が 未来の創り手に 一幼児教育 Q&A— 保護者や地域の皆様へ園長先生や地域の幼児教育のリーダーの方々へ より抜粋（2020/05/28）から4章で読み取っていききたい。

4. 人間関係にもとめられる教師の役割

4-1 調査結果①

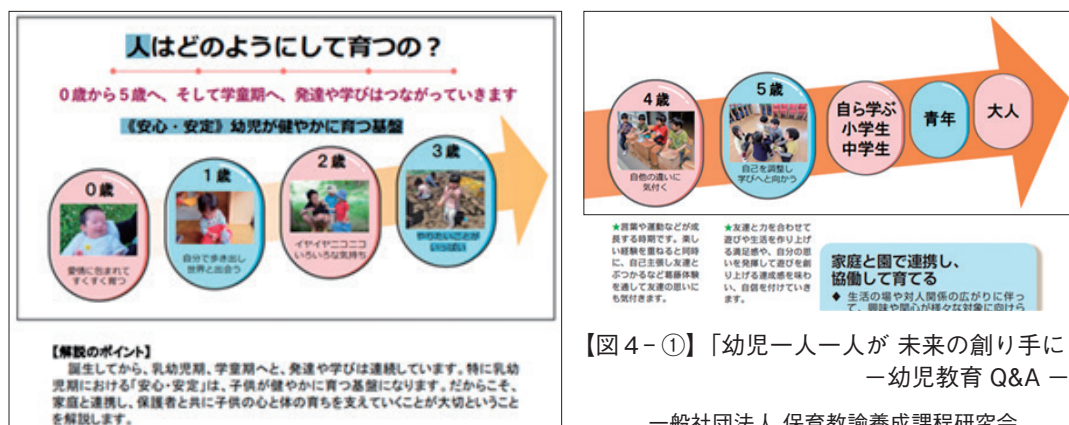
「領域の視点」を活かしつつ子どもの理解を深めるためには、保育現場の実践で出会う子どもの姿をどう理解しあい、生活のなかで総合的に分析していくかという具体的な方法を養成課程で育てていくことが鍵となる。そこで、領域「人間関係」では、子どもの関係・保育者との関係において、また地域や保護者との関わりの事例・事象をどう観察していくか、モデルカリキュラムに照らし合わせて考察する。

「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム（保育教諭養成課程研究会 2017）をどう解釈し実践していくのか、指標となる下記の資料を図4-①に示す。

令和2年一般社団法人保育教諭養成課程研究会は、『幼児一人一人が 未来の創り手に一幼児教育 Q&A— 保護者や地域の皆様へ』^{xiii)}の冊子の中で園長先生や地域の幼児教育のリーダーに向けた手引きを作成している。

冊子の冒頭に「幼児教育について保護者や地域の皆様にご理解をいただき、子供の健やかな成長を一緒に支えていくことを目指している。」という文面で紹介されている。

主な内容は、子供の育ち、遊びの重要性（遊びは幼児にとっての学び）、幼稚園教育（幼保連携型認定こども園の教育及び保育）を通して育みたい資質・能力、幼稚園教育（幼保連携型認定こども園の教育及び保育）と小学校教育とのつながり、家庭や地域との連携について書かれている。



【図4-①】「幼児一人一人が 未来の創り手に一幼児教育 Q&A—」

一般社団法人 保育教諭養成課程研究会
幼児一人一人が 未来の創り手に 一幼児教育 Q&A—
保護者や地域の皆様へ 園長先生や地域の幼児教育の
リーダーの方々へ（一部抜粋）

例えば、「園で教師は何をしているのか」という問いに、『教師は幼児の思いに共感し、一緒に考えたり、友達とのやり取りを支えたりします。教師の言動が幼児にとって、意欲を高めたり興味を広げたりするきっかけになるように心掛けています。園外の研修会にも

積極的に参加し、それぞれが学んだことを園内で共有し、日々の指導や園内の研究に役立て、幼児が様々な学びを得られる「質の高い教育」を追求しています。』^{xiv)} という文面がある。

教師が園で子どもを中心に人的環境として、何のために共にその場にいるのかという具体的な姿が示されている。変化する社会の中で、子どもを取り巻く環境がここ数年でも大きく変化している。幼児教育に携わる幼稚園教諭の役割、資質についてより深い視点で目の前の子どもを捉えることが求められていることは言うまでもない。養成機関においては、子どもの発達を理解し、専門的知識・技術に加え、その礎となる、心理的安全性が保たれる養護と教育を理解した人との関係を築く土台を具体的な関わりを通し、こどもと共に学び続ける姿勢がもとめられているといえよう。

井桁(2021)は『保育の質を考えあうシンポジウム 8.29』^{xv)}の中で「VUCAの時代行先が不透明で先が見えない時代に主体的・対話的・深い学びを、どのように考え子どもに保障していくか。」を具体的な子供の姿から検証している。

保育者の意図することに従う子どもが主体性のある子どもなのか、教えられたことを覚えてできるようになる、トラブルも起こさずみんな同じということがコミュニケーション力高いことなのか、幼児教育の現場でどうとらえるのか、フォーカシングイリュージョン(ダニエル・カーネマン)の例を上げこれからの保育について一石を投げ述べている。「対話的とはどういうことか」井桁自身が保育者時代の失敗から、子どもを観る視点として上手か下手かという評価のまなざしではなく、こどもが困っていることに気付く視点の専門性が必要と述べている。人間関係において人的・物的環境のかかわりが、子どもの気持ちに共感し、しなやかな発想と関係性を深め合う第一歩といえるだろう。

養成の場面では、子どもと教師の関わりを実践を通しての学び育むプロセスがもとめられているといえよう。

例えば、一例を紹介すると「園で教師は何をしているのか」という問いに、『教師は幼児の思いに共感し、一緒に考えたり、友達とのやり取りを支えたりします。教師の言動が幼児にとって、意欲を高めたり興味を広げたりするきっかけになるように心掛けています。園外の研修会にも積極的に参加し、それぞれが学んだことを園内で共有し、日々の指導や園内の研究に役立て、幼児が様々な学びを得られる「質の高い教育」を追求しています。』という記述がある。

教師が園で子どもを中心に人的環境として、何のために共にその場にいるのかという具体的な姿が示されている。

変化する時代の中で、子どもを取り巻く環境がここ数年でも大きく変化している。幼児教育に携わる幼稚園教諭の役割、資質についてより深い視点で目の前の子どもを捉えるこ

とが求められていることは言うまでもない。養成機関においては、子どもの発達を理解し、専門的知識・技術に加え、その礎となる、心理的安全が保たれる養護と教育を理解した関係性の築きと土台を具体的な関わりを通し、こどもと共に学び続ける姿勢がもためられているといえよう。

5. 領域「人間関係」と授業構想・現場保育実践の関係

人間関係における保育の質の考えとして、井桁（2021）は、結果を急がず、人として生きる楽しさに気付く保育をどう日常に取り込んでいくかを提案している。

汐見（2020）^{xvi} は、『“子ども主体の保育”の現在地<前編>』で答えのない時代に、子ども自身が自分のいのちの物語を生きる上で、保育者はどう子どもと関係を築いていくのかについて触れ、これからの社会では、1人ひとりの人間がアイデアを出し「保育者は子どもの意図、つもり、気持ち等を「善く」解釈してその子の気持ちに寄り添うこと」が求められると述べている。

さらに汐見（2021）^{xvii} は、子どもが人間として存在していることに原点を置き、保育者自身がその子らしさを感じ保育をしていく感性の重要性を述べている。子ども理解においてこどもをどう観ていくかという、日本の教育・保育における「学びを実践に変える新しい21世紀型の教育」として提案している。子どもを理解することは、アンダースタント、瞬間に判断し下から支えることであり、外からの評価で一律に判断することではないという新しい提案をしている。

領域「人間関係」においては、保育者養成の現場での、学生自身の学びの中に主体的で対話的な深い学びがもためられている。特に領域「人間関係」における、園外の地域資源・保護者・人的環境のひとつとしての保育者の関わりは、環境とも密接に関連し、多様な場面で人と関わる力がもためられているといえよう。では何を学ぶのか、目標を実現するためにどのような内容・方法がもためられるのかが地域・各大学の工夫すべき点である。

① 授業到達目標の定め方

モデルカリキュラム作成にあたっての留意事項の中で、『モデルカリキュラムは、各大学において教職課程コアカリキュラムに沿いシラバスを作成する参考としていくつかの授業モデル』が示されている。各大学において、その特色・編成・学生の興味関心に合わせて創意工夫されることを吟味し、取り入れることが求められている。

そのねらいは、学生が養成段階で「全体目標」「一般目標」「到達目標」と見通しを持って学ぶこと、そして、5領域の教育内容を実践するために必要な資質能力を明確化し、幼稚園教諭養成の質保証と幼児教育の質の向上につなげる意図がある。

以下に先行2校のモデルカリキュラム作成のねらい、到達目標、概要の文言から授業構想の特色に着目したい。

A校(2021)では、到達目標に、「(1)乳幼児期を取り巻く人間関係をめぐる現代的課題について、社会的背景や人生における乳幼児期の特性について踏まえ理解する。(2)乳幼児期の人間関係の発達について、乳幼児期の人と関わる力の発達、遊びや生活の中で育つ力の発達、自立心の育ち、協同の育ち、道徳性、規範意識の芽生え、家族や地域の関わりなど、保育園、幼稚園生活における関係論的視点から理解する。」

授業概要として、「現代の幼児の人間関係の育ちに影響を与えている社会的要因について理解し、幼児教育で保障すべき教育内容に関する知識を身につける。特に、領域「人間関係」の指導の基礎として発達論的視点について学び、他者との関係や集団との関係の中で乳幼児期の人と関わる力が育つことを理解する。」^{xviii)}という内容である。

一方B校(2021)は、授業のねらいを「人は人やモノとのかかわりによって発達していく。なかでも乳幼児期は人とのかかわりが特に重要である。本講義では保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示される領域「人間関係」の理解を深め、関係性の中で獲得していくこと、学び合うことや育ち合うことの重要性を知り、子どもの人間関係の発達について考える。その際、保育者は何をどのように援助しているのかにも注目し、子どもを観る視点や具体的な援助方法について学ぶ。また、他者とつながる保育活動案を作成し、幼児の人間関係を踏まえた活動を考える。」^{xix)}としている。

授業到達目標として「・乳児に対する応答的な関わり的重要性とその実践を知り、実習等に活かす。・人間関係が広がりを見せる中で、保育者が人とのかかわりを支えること、また子ども同士がつながることの重要性に気づきその援助について考える。・人間関係の育ちを意識し、活動や援助について考え、実践することができる。」をあげている。

2校のねらいに着目すると、柱は関係性の中で獲得していくこと、学び合うことや育ち合うことの重要性を知り、子どもの人間関係の発達について考える授業構想となっている。その際、保育者は何をどのように援助しているのかにも注目し、子どもを観る視点や具体的な援助方法について学ぶという発達論的視点と実践における子どもとの関わり援助の実際について理解する内容になっているといえる。

さらに幼稚園という枠組みに捕らわれることなく、家庭や地域社会における幼児の生活を踏まえた内容も盛り込まれている。

では次に現場実践とモデルカリキュラムの関係を考えてみたい。

② 保育実践と授業内容の紐づけについて

保育者養成は様々な視点を鑑みながら、授業構想が必要になってくると思われる。学生が育った家庭での価値観、人間関係を構築していく力を持って、その上に保育者としての

常識を身に付け、観察力、指導力に磨きをかけていくことが出来るように、保育者養成校における課題が明らかになってきた。資質能力は経験と体験から培われていき、保育者としての気づく力がその方向性を示している。

図5-①に示す本研究の協力園に限らず、1950年代から2021年の時代の変化の中で、創立時の園の名称・地域からもとめられる役割・機能に変化があった園は少なくないであろう。

さらに学校教育法・義務教育・高校教育を踏まえ、幼稚園教育要領の改訂の歩みから3法令改訂（改定）に至る要点も、国内外の幼児教育（保育）の大切さが実現されるという大きな動向によるものである。

図5-①にあげた2園の取り組みは、子ども理解を深めるところにねらいを置き、園の目標・グランデッドデザインに基づく、育みたい子どもの姿を共通理解する事である。2園ともモデルカリキュラムの項目を実践に置き換え、実践を見える化したことが特色である。

モデルカリキュラム	授業構想	A 園	B 園
<p>【1】講義初めの段階で、親子や兄弟関係、地域における子ども同士の関わり等、幼児を取り巻く人間関係について、1950年代頃からの年代毎に異なる特徴的な事例を挙げながら、現代の特徴と課題を考える機会を設け、講義の内容に関心をもたせる。 ※目標：（1）-1）</p>	<p>子育ての変遷と社会の変化 ・女性の社会的役割変化 ・世帯構造の変化→県内・外の姿 ・一億総活躍社会労働化</p>	<p>園の変遷 ・公立→私立へ民営化 ・保育園→認定こども園/ 外の姿</p>	<p>園の変遷 ・地域に数園ある保育園が合併 ・保育園→幼稚園→認定こども園名称幼稚園へ</p>
<p>【2】幼稚園教育において育みたい資質能力を領域「人間関係」の視点から考察し、大学生活で求められる人と関わる力との関連について話し合う。 ※目標：（2）-2）</p>	<p>・乳・幼児期の自立と協同性の育ち ・幼児期の道徳性・規範意識の芽生えと協同性を理解した保育者を目指す学生の姿</p>	<p>園の目標:何をそだてるのか </p>	<p>園のグランデッドデザイン </p>
<p>【3】幼児の様々な発達の特徴が人との関わりで育つことについてそれぞれの発達の時期の特徴と関連付けて理解できるように、具体的な事例を基に説明する。 ※目標：（2）-1）、（2）-2）、（2）-3）、（2）-4）、（2）-5）、（2）-6）</p>	<p>・養護と教育の一体化・乳幼児期の愛着形成 ・乳幼児期の自立と協同性の育ち</p>	<p></p>	<p></p>
<p>【4】幼稚園生活における規範にはどのようなものがあるか等について、具体例を挙げ、それぞれの決まりが幼児にとってどのような意味をもつか考え、話し合う機会を設ける。 ※目標：（2）-5）</p>	<p>・幼児期の道徳性・規範意識の芽生えと保育 ・友達と協同で使うスキル、困った時、わからないときに助けを求めるスキル</p>	<p></p>	<p></p>
<p>【5】人間関係領域の最新の知見に基づき、集団の中で見られる具体的な幼児の姿や幼児同士の関係の発達が理解できるように説明する。 ※目標：（2）-1）、（2）-2）、（2）-3）、（2）-4）、（2）-5）、（2）-6）</p>	<p>・幼児期から学童期以降への育ち ・人間関係の広がりや深まり（家庭・園・地域との関係性）</p>	<p></p>	<p></p>

【図5-①】モデルカリキュラムと授業構想、A園・B園保育実践

図5-①の2園の実践を保育者養成校で授業構想にどう紐づけしていくかを考える際に、園のねらいが保育実践（環境・人との関わり）で具現化されているかという考察から考えていきたい。

保育者として気付く力が語り合いや様々な意見を聴き、培われていく。

たのしかった、面白かったという感想だけではない、考察する視点を実践から逆照射し、学びを深め、専門的視点から授業を再構築していくことが求められているのではないかと筆者は考える。

その事例のひとつとして、園内研修で実践された人との関わりをモデルカリキュラムの項目から考察したい。

以下図5-②は、B園のグランデットデザインに基づいた保育の実践と「自分を見られる人との間で成り立つ人間関係の深まり」事例である。この事例をモデルカリキュラムにあてはめて考えてみたい。「遊んだら片づける」という内容は、規範意識・道徳性・遊びの協同性等が育つ場面であろう。

しかし、子どもの気持ちは「みんなで仲良く遊ぶ。遊んだら片づける。」という単純なことではではない。遊びから片づけの時間に起こる一コマに、5歳児の葛藤と関わる子ども、大人の意図的な姿と、子どもの心には葛藤や戸惑い、子ども同士の関わりが遊びの一コマに見えてくる。そのシーンを園全体で、大人かがどう関わり、子ども自身が自ら気持ちを動かし、その行動に辿りつくかをB園では丁寧に追っている。

<p>A. 自分に気が付いてくれる人は必ずそばに「いてくれる」ということ 養育者のbeingへの信頼 社会性と対人行動</p> <p>B. 自分は「いてもよい」存在として扱われていること。 自分のbeingへの信頼 自尊感情と自己受容</p> <p>C. 自分を見てくれる人との間でやりとりが成り立つ 相互性の気付き 自己統制による心理的な安心</p>		<p>左記の図は、友達遊びの中でもやややかかえた年長児に対する実践である。</p> <p>①自分に気が付いてくれる人は必ずそばに「いてくれる」ということを伝える責任との関係</p> <p>②自分は「いてもよい」存在として扱われている、大好きな友達との「遊び」を中心に子どもの協同遊びの深まり。③自分が見つけたものを通して起こしたアクションに大人が自分を見てくれる「安心との間でやりとりが成り立つ→自ら片づけるという自己統制による安心→「片づけをする気持ちへ」相互性の気付きから自己統制へ</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【図5-②】B園保育実践 自分を見てくれる人との間でやりとりが成り立つ姿

「正解を求めることをせず、他者との関係や集団との関係の中で人と関わる力が育つことを理解する。」ということはどういうことか、できないこと、しないことを良いか悪いかで判断せず、その時に発する言葉、視線、心の揺らぎにつきあいながら、子ども自身が自身で行動することに気付いていくことを教師が共感しながら支え、自分を見ていてくれる人とのやり取りから片づけたい気持ちにその場にいるすべての教師が寄り添っている。

6. 考察

子どもの豊かな感性と人間関係を育むために教師にもとめられていることは何か、秋田(2008)^{xx}は、現場の教師が相互に言葉を重ねたり、繋いだりしながら話しあう研修の重要性に触れている。その上で、保育の「見える化」と、子どもの事実を見る、学んだことを話し合う、明日からできることを語ることで、園のコンピテンスを高めていくことを提案している。研修を重ね、多様性のイメージを理解し合う中で、さまざまな多様性の姿を理解し「保育者自身の捉えの器が大きくなり、柔軟になる姿が必要とされる保育者の資質・能力に結びつく」と述べている。さらに秋田(2021)^{xxi}は『乳幼児期の教育とケア(ECEC)における有意義な相互作用 / +やりとりを支えるために』のシンポジウムの中で、職員の養成、経験、役割に応じた専門性向上のための活動は、「職員が有意義なやりとりに効果的にかかわるうえで成り立つ」と提案している。

平成29年7月に内閣府・文部科学省・厚生労働省により発行された教育課程説明会の資料には『子どもの主体的な活動を促すための教師の役割は「理解者」「よりどころ」と「共同作業」「モデル』』という文言で、教師を多様な関わりをもつ存在として示し、3法令全てにおいては「教育の場を意識した教師の役割」について記述している。

本研究では、先行研究調査から「幼児と教育・人間関係、指導法について」モデルカリキュラムの内容をつかみ、求められる幼稚園教諭の姿を確認した。さらに幼児教育の強化と保育者養成校の「何を学ぶか」の視点から、先行のA校、B校を例に子どもの行動を発達的に理解するために「『何をどのように指導するのか』という視点で『何を』を深める部分」を各養成校でどう位置づけているのか、また、神長(2017)が述べている、現場の実践を通し子どもの姿・教師の関わりをどう観て、聴いて、考えるのかという「総合的な経験の積み重ね」は、養成校の学びで育まれるきっかけになっていくと理解した。

さらに、丁寧に時間を積み重ねながら子どもを理解していくことで、人的・物的調整による子どもたちが自ら遊びだす環境構成の変革に取り組み保育が融合されていく方向に舵が取られている「A園とB園」の研修を重ねて子どもの姿と教師の関わりを深め合う園の努力と寛容性が目に留まった。

おわりに


保育内容領域「人間関係」で求められている資質能力の向上には、成長過程である発達論的視点と母親など、養育者/地域社会とのコミュニケーションを通し人との関係が積み重ねられていくことが不可欠である。幼児教育の現場では新型コロナ対策、人手不足、さまざまな勤務体制等、課題は多い。しかし、変化する社会の中で問いを重ね、子どもを慈しみ知恵を出し合い語り合う学びが、もとめられている。幼稚園教諭に多様な専門性をもとめられている。昨今の社会状況を考えると、主体的に学ぶ・対話的に学ぶ意欲を育むこ

とが汐見(2020)の語る、「21世紀型保育」^{xxii}へと繋がることであろう。これからの時代に求められる幼稚園教諭の資質能力をあきらかにし、何をどう教えるか、養成段階で何を身に付けるか、その意味と理解が問われている時代といえる。

参考文献

- ・幼稚園教育要領(2017告示) 第1章総則 幼稚園教育の基本 ・3内容の取扱い(1)幼稚園の教育内容等:文部科学省(mext.go.jp) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年3月告示)(※内閣府ホームページ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領の全部を改正する件について 別添資料(PDF)へリンク)
- ・一般社団法人 保育教諭養成課程研究『平成28年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—』平成29年3月
- ・幼稚園教諭養成課程をどう構成するか—モデルカリキュラムに基づいた提案— 無藤 隆 代表 保育教諭養成課程研究会 編(2017)
- ・神長美津子『幼稚園教諭・保育教諭研修ガイドⅡ—養成から現職への学びの連続性を踏まえた新規採用教員研修—』平成30年6月21日 幼児教育の実践の質向上に関する検討会(第2回)

引用文献

- i) 無藤 隆「3法令改訂(定)の要点とこれからの保育の中で」p66
- ii) 無藤 隆 代表 保育教諭養成課程研究会『「領域に関する専門的事項」のモデルカリキュラム』(保育教諭養成課程研究会2017) pp13~14
- iii) 「3法令改訂(定)の要点とこれからの保育の中で」pp22~25 第三章 pp60~66
- iv) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(mext.go.jp)
- v) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(2018) p20
- vi) 飛田 隆『幼稚園教育要領における「人間関係」についての一考察』茨城キリスト教大学紀要第53号 31 人文科学 p.31~38 Ibaraki Christian University Library
- vii) 文部科学省、幼稚園教育要領解説(平成30年3月)株式会社フレーベル館 平成30年p2・p167
- viii) 一般社団法人 保育教諭養成課程研究『平成28年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—』平成29年3月
- ix) 幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究:文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm
- x) 神長美津子『幼稚園教員などに求められる資質能力とその研修体系—平成26年~29年度文部科学省委託幼児期の教育内容深化・充実調査研究の結果を踏まえて—』平成30年6月

- xi) 中川智之、橋本勇人、入江慶太、尾崎公彦、笹川拓也、大江由美『幼稚園教諭養成課程における「領域に関する専門的事項」に求められる 授業内容に関する一考察 ―保育内容領域「人間関係」及び「環境」のモデルカリキュラムを手がかりとして―』川崎医療短期大学紀要 pp11～（2018）
- xii) 無藤 隆 代表 保育教諭養成課程研究会『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～ モデルカリキュラムに基づく提案～』 pp144～145（榊萌文書林）
- xiii) 一般社団法人 保育教諭養成課程研究会『幼児一人一人が 未来の創り手に ―幼児教育Q&A― 保護者や地域の皆様へ』園長先生や地域の幼児教育のリーダーに向けた手引き 令和2年
www.youseikatei.com/pdf/20200528_4.pdf
- xiv) 前出『幼児一人一人が 未来の創り手に ―幼児教育Q&A― 保護者や地域の皆様へ』園長先生や地域の幼児教育のリーダーに向けた手引き』
- xv) 井桁（2021）は『保育の質を考えあうシンポジウム2021.8.29』
- xvi) 汐見 稔幸（2020）『“子ども主体の保育”の現在地<前編>』
- xvii) 汐見 稔幸（2021）『保育の質を考えあうシンポジウム2021.8.29』
- xviii) 白梅学園シラバス2021（portal.shiraume.ac.jp/public/web/Syllabus/WebSyllabusSansho/UI/WSL_SyllabusSansho.aspx?P1=）
- xix) F-Station（fujijoshi.ac.jp）カリキュラムマップ2021 pp42～43
- xx) 秋田喜代美（2008）「園内研修と保育支援」『臨床発達心理実践研究』3 pp35～40
- xxi) 秋田喜代美 発達保育実践政策学センター公開シンポジウム「人生の豊かなはじまりを支える 幼児教育・保育～OECD幼児教育・保育白書第6部資料より～」（2021）
- xxii) 汐見 稔幸（2020）YouTube セミナー 「21世紀型の保育へ～学びを実践に変える」
<https://note.com/musicandmagic/n/na871fc98d0e3> 2020.9.2